

で2又せず、第5間室も隆起しない。7~8月。分布、本州。体長、3.3mm”とその特徴を記している。

1977年には佐藤正孝博士がヒメドロムシ科の日本産の目録を発表、その中で原記載での *Stenelmis* 属から *Graphelmis* 属の種として取扱っている。

1985年には、同じく佐藤博士がカラーで図説、その中で”3.4-3.7mm。触角の第11節は前2節を合わせたものほぼ同じ長さ。上翅はやや長い細毛を装い、第4と第5点刻は中央で合一する。まれ。本州”と記されている。

以上の図説並びに記載によるそれぞれの特徴などの点から(送られてきた標本の体長は3.4mmであった)、山本義丸氏がわざわざ送ってこられたドロムシはアヤスジミゾドロムシ *Graphelmis shirahatai* (Nomura, 1958) と同定した次第である。

せっかく神谷博士が *Stenelmis yamamotoi* Kamiya キアシノドロムシとして記載発表されようと予定しておられたのに残念な結果になってしまった次第である。ただこの *G. shirahatai* の方も非常に稀な種のように、勿論筆者の貧弱な所有文献からは他の産地の記録が見出されず佐藤博士もまれであると記されているように、現在山形県以外の産地が知られていないのではないかと考えられている。ただ初めに記したように山本氏が採集さ

れた時は、かなりの個体を採集しておられるようで、このドロムシが兵庫県下からの初記録になると同時に、現在はたして県下の他の地域での産地が無いのかどうか調べてみる必要があるように思われる。どちらにしてもこの大変珍しいそして興味あるドロムシが、兵庫県下から記録出来たことはうれしいことで、この機会を与えて下さった山本義丸氏に厚く御礼を申し上げさせて頂きたいと思っている。

#### <参考文献>

- S.Nomura (1958) Drei neue *Stenelmis*-Arten aus Japan (Coleoptera, Elmidae)  
Entom. Rev. Japan 9(2):41-45, pl.8.  
野村 鑽(1963) 原色昆虫大図鑑 第2巻(甲虫篇) pl.73, f.7, p.415. (北隆館・東京)  
M.Sato (1977) 日本産甲虫目録 No.9 ヒメドロムシ科 p.3 (甲虫談話会・東京)  
佐藤正孝(1985) 原色日本甲虫図鑑(II)  
pl.80, f.9, p.437. (保育社・大阪)  
佐藤正孝(1989) 日本産昆虫総目録 I (p.318)  
(九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター共同編集出版。九州)  
(TAKAHASHI TOSHIO 神戸市兵庫区氷室町1-44)

## フタイロカミキリモドキの分布\*

高橋寿郎

姫路昆虫同好会結成20周年記念特別号会誌”遊蟲千年”(XI.1995)誌上に赤穂市坂越湾に浮かぶ小島である生島に、相坂耕作氏他3氏が訪問、この島の昆虫調査をされた報文が発表されていた。

時間的制約があったのか調査というところまでにはいたっていないと思うが、初めて原生林の同

島の昆虫相の一端がわかったことは大変貴重であると共にうれしいことである。今回の記録の中で、フタイロカミキリモドキ *Oedemeronia sexualis* (Marseul, 1876) がある。この種は南方系の種であり、兵庫県下での記録は3例目である。ところで、この種の分布というのは今まで日本にて発表されている代表的な図鑑目録を見てみると(河野広道,1950. 中根猛彦,1956,1963. 宮武睦夫,1985. 佐藤正孝,1989)、どれも申し合わせたようにこの種の分布は四国、九州、対馬、五島列島、屋久島、トカラ諸島、奄美大島、沖縄、石垣島、西表島、与那国島となっていて、本州での分布というのは

\*兵庫県甲虫相資料・319

全く無い。ところでこの種の兵庫県下の記録は次の3例がある。即ち、洲本市由良町〔堀田, 1978〕, 飾磨郡家島〔畑中・辻, 1974〕, 赤穂市生島〔相坂ほか, 1995〕。これらは本州でないといえれば本州ではない。いずれも瀬戸内海に存在する島々である。それ故分布地に本州を掲げていないといえればそれまでであるが、行政区画でいえば兵庫県に所属する。本州といった表現がいけなければ上記地点は分布に加えて貰わねば困るということを手張しても良いのではないかと思う。或いは兵庫県の南側海岸線沿いに本種を見出すことは不可能なことではないと考えている。現在の“毒グモ”騒ぎの例にも見られるように、南方系の種であっても結構日本に定着しているものは他にも多くいることだと考えている。直接我々と関連がないこの虫

であるが、安住の地を本州の暖かい地域に求め定着することはあり得ることではないだろうか。

<参考文献>

河野広道, 1950 日本昆虫図鑑  
f.3345, p.1165 (北隆館・東京)

中根猛彦, 1956 日本の甲虫(30)  
新昆虫 9(1):55-57.

中根猛彦, 1963 原色昆虫大図鑑 第2巻 (甲虫篇) (北隆館・東京)  
pl.130, f.20, p.260.

宮武睦夫, 1985 原色日本甲虫図鑑(III)  
pl.69, f.22, p.408. (保育社・大阪)

佐藤正孝, 1989 日本産昆虫総目録 I . p.410.  
(TAKAHASHI TOSHIO 神戸市兵庫区氷室町1-44)

コガネムシの食草と集団行動に  
ついての報告

新家 勝

コガネムシは、原色日本昆虫大図鑑(北隆館昭和38年4月10日)に「6~7月に多く、種々の広葉樹の葉を食害する」と記されているとおり、多種の植物の葉を食害する。

ところで、筆者は1994年6月17~18日に西宮市田近野町の武庫川川原で、多数のコガネムシがメドハギ(マメ科の多年生草本)に集まり、集団で葉を食べるとともに交尾しているのを目撃したので報告する。この場所は武庫川の中洲の痩せ地で、ノイバラ、ヨモギ、マツヨイグサ類などが生えており、メドハギも多いが、この時期、普通はノイバラが食草となり、一本のノイバラに数頭がいて葉を食べているのがよく見られる。当日は、まだ十分に成長していない、60cm程度の草丈のメドハギ10数本に、10~20頭の本種が集まっていた。当

年は多く発生したようであるが、これまで食草とは思っていなかったメドハギに、あまりにも多く集まったことに興味をもった。



(NIINOMI MASARU 宝塚市光明町8番57号)